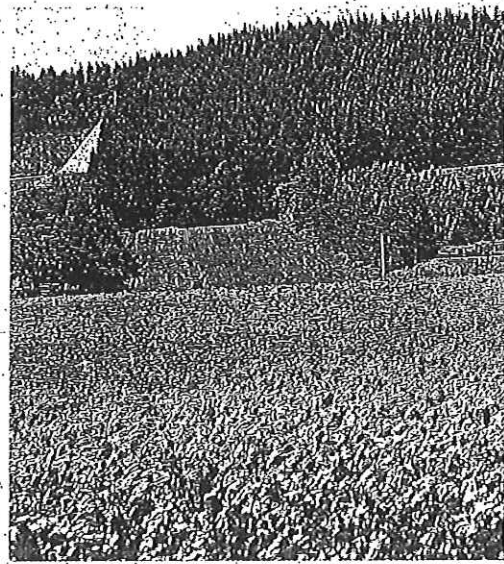


# 大楽毛物語

8



## 乾燥地を求めて鳥取村

明治17年、18年当時釧路川にはまだ橋がなかった。官設の渡し船が支庁坂下あたりから北に渡っていた。現在の北大通の右手は一面の草原で、ところどころの沼地には気味悪いほどの柳の林で、釧路駅のあたりはひざまでぬかる谷地だ。北大通7、8丁目からいったん

左に海岸の方に折れ、中途からさらに右折して高みの場所を何とか見つけて釧路川から北に14、5町も過ぎるとやっと乾いた草原がひろがっておりここからが鳥取の入口となる。

阿寒川を右に、左手に海が見える道路を川沿いに北へ40〜50間ごとに道路をはさみ、割り当てられた移住小屋が建っている。

ここへ順番に入地するのである。各宅地1千坪と農耕地5町歩。根室県庁の勸業派出所は3番組の中程、道路東側の柳の木の中に建てられた。

これらの住宅は佐々木與兵衛、豊島庄作、原田寺吉らが加わって請け負った官営事業である。彼らはこの住宅105戸のほか、に厚岸郡役所釧路出張所の建築工事も請け負い今という独占企業である。

この建築資材に5千石近い木材が必要となり製材機なるものが初めて導入された。

材は厚岸から運ばれ、遠くは函館からも切り込み材を移入した。しかし、需要に應える大工は釧路にいなかった。

**四分板一枚の平屋建て**

住宅といってもまさしくパツク建て。木造、桁ぶき、板囲いの平屋で間口5間半、奥行3間、建坪16.5坪。表、裏口と

もに板戸で入り口をはいると6坪の土間、6坪と4坪半の座敷があり、座敷には3尺×6尺の炉が切つてあつた。前に3尺の格子窓、裏の水流じの上に小さな武者窓。壁は4分板を外側に打ちつけただけ。天井板も張つておらず、6畳分の畳以外は藁と筵だけだった。

**鉄と鎌と耕馬1頭貸与え**

さて、移住者たちは住み慣れた鳥取の家と較べてあまりにも殺風景な建物に不安を覚えながらもまずは農作業をどのようにすすめるか、何を植へ何が獲れるのか気になった。移住者たちにはまず鉄、鎌が渡され、2戸に1頭（18年組には1戸1頭）の耕馬が貸与され、種子もいろいろと配られた。

舶来の3頭引き新墾用プラオも伝授しようとしたが、俄農民たちには勝手がわからず役立たずに終わった。釧路開墾の苦闘が

始まった。

「百姓仕事、生まれて初めてだし、何とも説明がつかない辛さで、口にはださなんだが腹の中でいつも泣いたもんだ」と近藤喜孝は言った。唐鉄を振りかざして草の根原（ヤチ坊主のこと）を耕しているうちに、だんだん慣れてきてふた月もすると平気な者も出てきたという。

北辺の守りを1つの理由として北海道各地へ官営土族移住は、陸軍省の「屯田兵移住」と変更され、500戸、800戸単位の移住が励行された。こうしてこの年の秋開墾して作付けした総面積3町5反1畝17歩。馬鈴薯412俵、ダイコン1万5千520本、カブ5千100個、ソバ2斗5升、ムギ5升。草原に点々と出現した畑は野兔と野鼠と昆虫たちの格好の餌食の場となった。

北海道新聞

購読お申し込みは

フリーダイヤル ヨムヨ・ドーシン  
0120-464-104

または右記販売所へ

(有)丹葉新聞店

釧路市大楽毛5丁目8の1

TEL:57-8228